

# トラフグ養殖現場における新薬の効果

- トラフグ養殖日本一の復活を目指して -

養殖研究部 野村昌功

## はじめに

熊本県の養殖業においてトラフグ養殖は重要な産業の一つであり、図1に示すとおり以前は全国1位の生産量を誇るトラフグ養殖県であった。しかし、平成8年のホルマリン問題の発生以降、生産量は減少し、現在では最盛期の三分の一程度の631t(平成15年現在)まで生産量を下げている。また、生産量の低下に加えトラフグ魚価の低迷も続いており、本県のトラフグ養殖業は危機的状況に陥っている。

生産量低下の大きな原因の一つとして、ヘテロボツリウム(以下エラムシ)の寄生により起こるエラムシ症による魚病被害が挙げられる。水産研究センターでは、薬浴剤「マリンサワーSP30」の開発や「トラフグ養殖マニュアル」の発行を行い生産量回復に努めてきたが、生産量を大きく回復させるには至っていない。

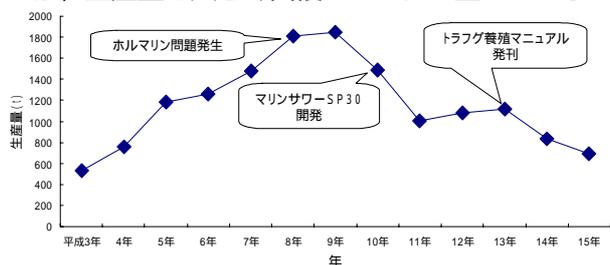


図1 熊本県の養殖トラフグ生産量の推移

このような中、熊本県と明治製菓(株)が共同で開発した新たなトラフグのエラムシ駆虫剤「マリンバンテル」(以下MBT)が平成16年7月に発売された。MBTはエラムシの未成熟虫のみならず、今まで困難であった成虫の駆虫が可能であり、さらに経口投与という簡易な方法で駆虫ができることから、養殖現場での普及が期待されている。

今回は、発売から1年が経過したMBTの養殖現場における有効性、普及状況、安全性について調査を行ったので報告を行う。

## 試験の概要

### 1 一斉投薬試験

天草郡御所浦町沖合に設置された海面生け簀でトラフグ養殖を行っている、全ての養殖業者21業者が飼育している全ての養殖トラフグ(対照群を除く)に対して投薬を行い、魚の状態及びエラ

ムシの寄生状況等について調査を行った。

### 2 市販後調査

御所浦町および龍ヶ岳町の沖合に設置された海面生け簀で飼育されているトラフグに対してMBTの投薬を行い、魚の状態及びエラムシの寄生状況について調査を行った。

### 3 生産状況調査

平成17年度における2歳魚の生残尾数、出荷状況およびMBTを使用した際の効果について聞き取り調査を行った。

## 結果および考察

一斉投薬試験の結果、2歳魚に対しては投薬後17日目まで非常に高い駆虫効果が見られたが、当歳魚に対してはやや効果が低い傾向がみられた。しかし当センターが推奨する作成方法で作成した投薬餌料を用いて行った市販後調査においては、調査対象魚が当歳魚であったにもかかわらず高い駆虫効果がみられた。よって、投薬餌料を適正な方法で作成することにより当歳魚に対しても十分な駆虫効果が出ることを示唆された。

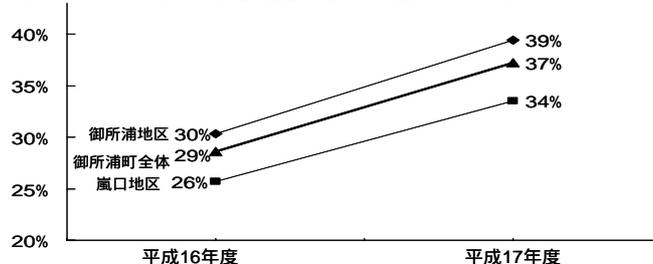


図2 御所浦町における生残率の推移

図2に示すとおり、聞き取り調査の結果、県内主要生産地である御所浦町においては、昨年度の生残率が平均29%であったのに対して、稚魚期から一斉投薬等によりMBTの投与を行った平成17年度の生残率は平均37%であり、生残率の向上がみられた。なお、生残率が向上した生産者の8割以上は、生残率向上の要因はMBTの効果によるものという回答であった。

しかし、効果が低かった、一時的に摂餌性が低下した等の事例も報告されているので、当センターでは、薬剤開発に携わった利点を生かし、問題点の原因を究明し、さらなるトラフグ養殖発展のためのバックアップを行っていく。